

## 第2節 ベンショ塚古墳出土馬具の評価

ベンショ塚古墳から出土した馬具は、第2埋葬施設出土の鞍（鞍金具）と雲珠・鉸具である。古墳の築造時期からみても初現期の馬具とみてよいと思われるが、古墳時代の鞍（鞍金具）、雲珠にみられる諸要素を分類し、他の初現期の鞍（鞍金具）、雲珠と比較することで、ベンショ塚古墳出土馬具の位置づけを行いたい。

### 第1項 鞍金具の分類と位置づけ

古墳出土の鞍金具は、覆輪、海金具、磯金具、鞍からなる。必ずしもすべての金具を備えておらず、盗掘等によって破壊され、欠けた金具もあり、すべてを同列に扱うことはできない。しかし、部品ごとに分類(図56)して、おおまかではあるが先後関係等をみていくことにする。覆輪の断面形態による分類 4種に分類できる。

第1類 断面が三角形をなす。幅1cm程度の狭いものに限られる。ベンショ塚古墳と岐阜県中八幡古墳例がある。ただし、中八幡古墳例は、緩やかに折り曲げたもので、全体にわたって明確に三角形をなしているとはいいがたい。古墳の年代は中期である。

第2類 断面がU字形をなす。幅1cm程度の狭いものとそれ以上の幅が広いものとがある。大阪府鞍塚古墳例をはじめとして、大部分のものがここに含まれる。中期、後期のいずれにもある。

第3類 断面が五角形。例として、奈良県市尾墓山古墳、福岡県沖ノ島7号遺跡をあげうる。前者の年代は後期前半である。

第4類 断面が方形。例として、奈良県珠城山3号墳、福岡県新延大塚古墳、同宮地嶽古墳をあげうる。古墳の年代は後期後半である。

古墳の年代観からみると、断面形に稜を有するものは、第1類→第3類→第4類という順に変遷がみられ、一定方向の変化を示していない。ただ、第3類と第4類では、装飾的に明瞭な稜線を設けているのに対して、第1類では、鞍橋の木地幅に合わせた狭いものにするために、断面形が三角形になったものと解される。また、第2類については、幅狭から幅広へ変化している。これらの変化は出土した古墳の年代とも符合する。先後関係は、断面形態よりもむしろ木地の厚さの変化に対応した幅の変化にみられ、およそ中期は幅1cm程度の幅の狭いもの、後期は1cm以上の広いものとするができる。ベンショ塚古墳の覆輪は、幅の狭い古い形態とみられる。覆輪の爪先での木地との接合 爪先で木地との接合に何らかの仕様を施すものがあり、形態は2種類ある。

A類 外側から鉸を打ち込んで接合する。例として、ベ

ンショ塚古墳のほか、大阪府鞍塚古墳、同御獅子塚古墳、同誉田丸山古墳1号鞍をあげうる。いずれも中期の古墳である。

B類 先端を内側に折り曲げて接合する。例として、奈良県市尾墓山古墳、同藤ノ木古墳等をあげうる。後期の古墳に限られる。

出土した古墳の年代観からみて、A類はB類よりも古く位置付けることができる。A類のような仕様を施す例は数少ない。ベンショ塚古墳の爪先の形態は古く位置付けられる。

海金具の分類 海金具が存在する例はわずかである。全面に金属板を貼るものと部分的に金属板を貼るものがある。ベンショ塚古墳例は後者である。また、部分的に金属板を貼るものと数枚の金属板を使って全面に貼るものには、海の部分を分割する形態が大きくみて2種類ある。ひとつは縦方向に分割するもので、ベンショ塚古墳鞍のように数枚の方形板を使用するものや鉸帯で区画するものがある。もうひとつは、海の曲がりにあわせて横方向に分割するものである。前者では、ベンショ塚古墳以外に奈良県市尾墓山古墳、同東大寺山6号墳例等をあげうる。後者では、宮崎県西都原出土例、奈良県藤ノ木古墳鞍B等をあげうる。また、藤ノ木古墳鞍Aのように前者と後者をあわせたような例も存在する。この分類による先後関係はみとめがたい。

なお、海の部分を方形板金具で構成する鞍は、ベンショ塚古墳以外に国内の類例を知らない。しかし、同様の方形板金具が出土している古墳がある。京都府物集女車塚古墳、和歌山県寺内34号墳、同天王塚古墳、福岡県竹原八幡塚古墳、同新延大塚古墳、同梅林古墳である。ただし、これらはいずれも磯金具とは離れた状態で出土しており、必ずしも海金具であるという確証はない。縦方向に分割する形態は、数枚の方形鉄板で海の部分を分割するベンショ塚古墳鞍が最も古いもので、のちに鉸帯等によっても区画するようになったと考えられる。

磯金具の分類 平面形態によって、長さに比べて幅が広いものと狭いものとに分類にできる。広いものにはベンショ塚古墳、大阪府誉田丸山古墳、同鞍塚古墳、滋賀県新開1号墳例等をあげうるが、それ以外の大部分は狭いものの範疇に含まれる。幅広のものは、中期古墳から出土したものに限られる。幅の狭いタイプは、一部を除いて中期にはみられない。幅広のものから幅狭のものへという変遷が考えられる。ベンショ塚古墳の磯金具は、中期の古いタイプに含まれる。

また、磯金具周縁の形態によって3種類に分けられる。

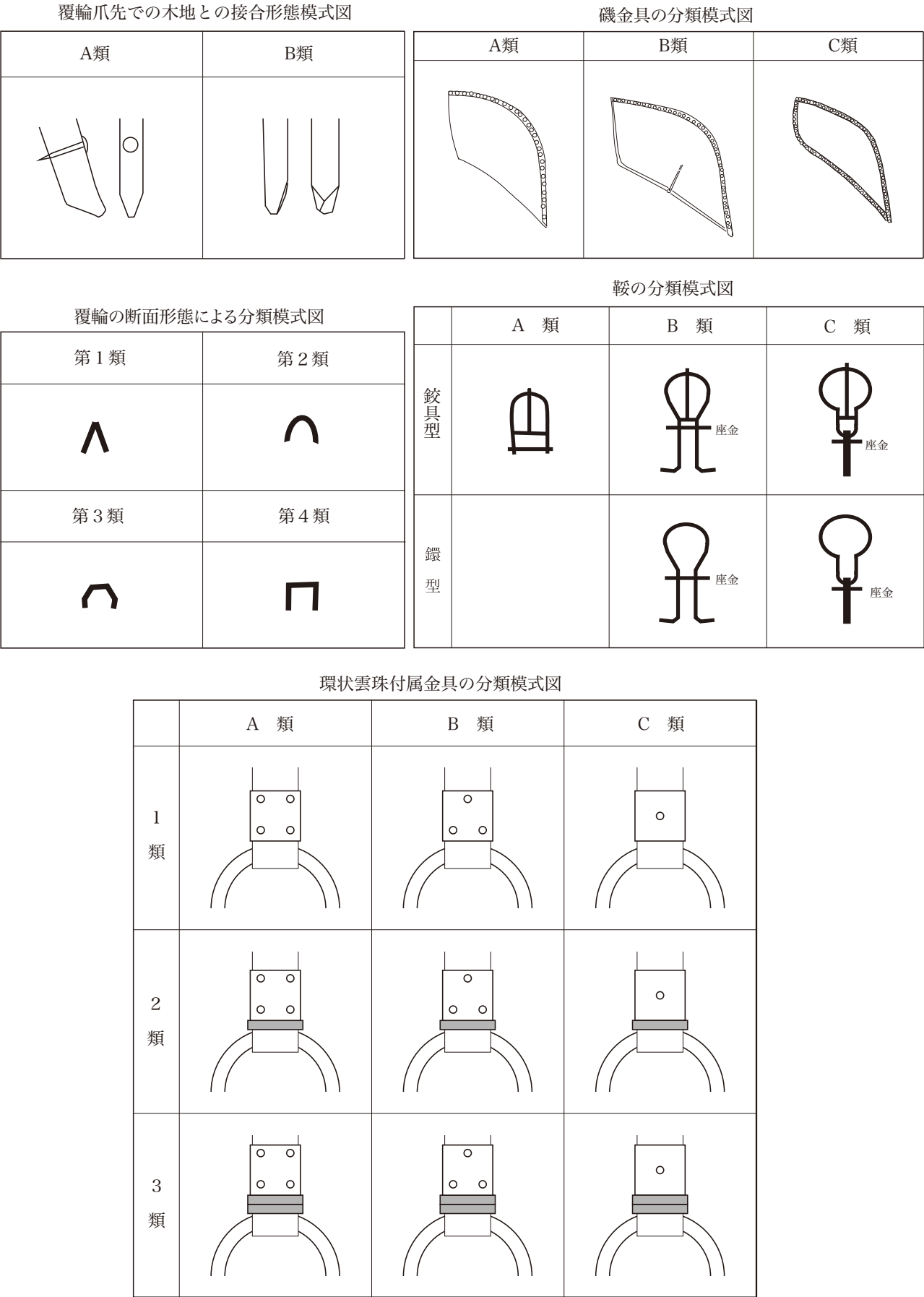


図 56 馬具分類図

A 類 上辺は縁金具を鉾留めするが、下辺は鉄板（金属板）がそのまま露出した状態であるもの。例として、大阪府誉田丸山古墳、同御獅子塚古墳、滋賀県新開 1 号墳をあげうる。中期の古墳にみられる。

B 類 上辺は A 類と同様に縁金具を鉾留めするが、下辺は鉄板の縁を折り返すもの。例として、ベンショ塚古墳、大阪府鞍塚古墳、奈良県牧野古墳をあげうる。牧野古墳以外は中期の古墳である。

C 類 上辺、下辺ともに縁金具を鉾留めするもの。例として奈良県市尾墓山古墳、藤ノ木古墳 B・C 鞍、京都府物集女車塚古墳、大阪府長持山古墳等がある。中期末の古墳からみられるが、後期の古墳に多くみられる。さらに、部分的に磯金具の縁に突起を造り出し、その部分で鉾が磯金具と接続する簡略化したものがある<sup>(1)</sup>。例として、福岡県新延大塚古墳、岡山県王墓山古墳、島根県岡田山 1 号墳等がある。後期後半の古墳に多くみられる。

磯周縁の装飾化を一定方向の変化と考えた場合、型式学的に A 類→B 類→C 類という変遷になる。これは古墳の年代観ともおおむね矛盾しない。ベンショ塚古墳の磯金具は、型式学的に最も古くは位置付けることはできない。しかし、古墳の年代観からみて、A 類と B 類との間に明確な時期差があるとは考えがたい。A・B 類は古い一群で、C 類は新しい一群と考えられる。

なお、中期のものに限れば、5 世紀後半を境に鉾帯の鉾間隔が密なものから粗いものへ変化するという指摘がある<sup>(2)</sup>。鉾間隔が密なベンショ塚の磯金具は、ここでも古く位置付けられる。

鞍の分類 増田精一によって、形態から刺金を有する鉸具型と鑲型とに分類し、脚が鉸具ないしは鑲と一体のもの、分離したものに分けられている<sup>(3)</sup>。また、これに加えて、脚の形状からさらに細分されている<sup>(4)</sup>。ここでは以下の分類で考える。

#### ・鉸具型

A 類 刺金を有する鉸具の一形態。基部に横棒を渡す。奈良県ベンショ塚古墳、同石光山 8 号墳、和歌山県大谷古墳、岡山県随庵古墳、宮崎県下北方 5 号地下式横穴等に例がある。

B 類 鉸具と鉸具の基部が伸びた脚が一体のもの。脚の末端は外側に折り曲げる。大阪府長原七ノ坪古墳等に例がある。

C 類 鉸具と脚が分離したもの。奈良県市尾墓山古墳、同藤ノ木古墳等に例がある。

#### ・鑲型

B 類 鑲と脚が一体のもの。鉾脚の末端は外側に折り曲

げる。愛知県豊田市大塚古墳例がある。

C 類 鑲と脚が分離したもの。奈良県牧野古墳、同烏土塚古墳等の例がある。

これらは、脚の形態によって、磯金具、座金具の孔の形態も異なり、A 類・B 類では小孔が 2 個穿たれ、C 類では方形の孔が穿たれるのが通常と思われるが、実際には、A 類・B 類でも方形孔のものは存在する。

出土古墳の年代観からみると、鉸具型、鑲型ともに A 類→B 類→C 類（A 類は鉸具型のみ）という変遷をたどったものとみられる。B 類は鉸具型 A 類の基部が伸びた脚を有することから、まず鉸具型 A 類→B 類が出現し、遅れて鑲型 B 類が出現したものと思われる。以後、ともに C 類へ変遷したものと思われるが、おくれて鉸具型、鑲型を組み合わせたような刺金のある鑲型 C 類が出現する。鉸具型 A 類と B 類については、中期あるいは後期初頭に限られる。鉸具型 A 類に分類されるベンショ塚古墳の鞍は、最古型式である。

以上のことから、部品からみた古墳出土鞍の新古と、それによってベンショ塚古墳鞍が形態的に古く位置付けられることが明らかになったと思う。

## 第 2 項 環状雲珠の分類と位置付け

ベンショ塚古墳出土の環状雲珠は環状品と付属の革留金具からなる。環状品に直接に革帯を結ぶものもあるかもしれないが、雲珠かどうかは出土状態によって判断せざるを得ない。環状雲珠の分類には、断面形による分類があるが、型式学的に先後関係をみるのは困難であり、付属する革留金具・責金具で分類する方が有効かと思われる。また環状辻金具についても用途は多少異なるものの環状品と革留金具からなる基本構造は、環状雲珠と同様とみる。そして、次のように革留金具の形態で A～C 類に分類し、責金具の有無と数とで 1～3 類に分類する。これらを組み合わせて、A1 類～C3 類の 9 分類とする。

A 類 方形の革留金具が付属する。鉾は 4 本を四隅に配するが、中央に 1 本加えた 5 本のものがある。

B 類 方形・五角形・爪形の革留金具が付属する。鉾は 3 本である。

C 類 方形・五角形・爪形の革留金具が付属する。鉾は中央に 1 本である。

1 類 責金具は伴わない。

2 類 責金具が 1 条ずつともなう。

3 類 責金具が 2 条ずつともなう。

これらは型式学的にみて、A 類→B 類→C 類、1 類



→2類→3類というように、鉾の簡略化と責金具の多  
条化という一定方向の変化がみられる。

具体的に出土古墳をみると、A1類には、ベンシ  
ョ塚古墳、兵庫県西宮山古墳、A2類には、滋賀県新開  
1号墳、埼玉県稲荷山古墳、A3類には、東京都粕江亀  
塚古墳、埼玉県目沼9号墳、B1類には、大阪府鞍塚古  
墳、同御獅子塚古墳、B2類には、京都府宇治二子山古墳、  
同物集女塚古墳、滋賀県新開1号墳、C1類には、奈  
良県ダケ古墳、兵庫県西宮山古墳、三重県井田川茶白山  
古墳、C2類には、和歌山県大谷古墳、岡山県天狗山古  
墳、埼玉県稲荷山古墳、C3類には、奈良県市尾墓山古墳、  
大阪府七ノ坪古墳をあげうる。

複数の環状雲珠・革留金具が出土し類型が重複してい  
る古墳があるが、個々の古墳の年代観からみて、ある程  
度の型式学的変遷を反映しているように見える。また、  
横穴式石室などの追葬が可能な埋葬施設から出土してい  
る場合、なかには環状品と付属金具の関係が不明瞭なも  
のもある。たとえば、C1類などは、鉾1個であるのに  
責金具が伴わなければ、革留めの状態は非常に不安定で  
ある。また、責金具を伴わないA1類、B1類には鉾の  
先端を折り曲げたり、かして直接革帯との接合をはか  
るのに対して、責金具を伴う2類、3類ではこれを行  
わないものが多く、鉾の長さも短いものが多い<sup>(5)</sup>。し  
たがって、責金具の存在が鉾の数の減少、鉾脚の長さの  
減少をもたらしたと思われる。鉾脚の長さなども考慮に  
いれて、今一度、上の変遷をみると、鉾脚の先端に  
何らかの処置を行ったA類、B類については、中期の  
古墳から出土したものに限られ、型式学的変遷はいっ  
そう確かなものといえそうである。A類・B類について  
は、あまり時期差が考えられないところから、最初から  
2系統が存在し、責金具の出現によって鉾脚の長さが減  
少し、A類・B類の出現よりも若干おくれてC類が出  
現した可能性が高いと思われる。いずれにしてもベンシ  
ョ塚古墳の環状雲珠は、最古型式に位置付けられよう。

### 第3項 ベンショ塚古墳鞍金具の系譜

以上のことから、ベンショ塚古墳の馬具は、鞍金具も  
環状雲珠もそれぞれ最古型式に位置付けられ、型式学的  
にみても初期の馬具と考えて良いと思われる。つづいて、  
ベンショ塚古墳の鞍金具の系譜について、初現期の鞍金  
具の形態から考えてみたい。初現期の鞍金具については、  
主に2つの説があり、北野耕平は鉄板張りの鞍金具を  
金銅板張りをもとに作られた国産とみており<sup>(6)</sup>、また、  
千賀久は、新羅・加耶の同時期に類例が存在することか

ら舶載品とみて差し支えないと考えている<sup>(7)</sup>。ここで  
はまず、比較的残存状態の良い、覆輪、海金具、磯金具、  
鞍を備えた国内の古墳から出土した鞍金具をベンショ塚  
古墳の鞍金具と比較してみよう。

大阪府羽曳野市誉田丸山古墳<sup>(8)</sup> 鞍は2具あり、いず  
れの鞍も前輪、後輪の覆輪、海金具、磯金具、州浜金具  
が揃っている。金具は、すべて金銅製で、磯金具と海金  
具には龍紋の透かしがあり、装飾性の豊かなものである。  
覆輪の断面は、U字形で、幅狭である。1号鞍の爪先で  
の木地との接合は、ベンショ塚鞍と同様に外側から鉾を  
打ち込んで接合しているようである。磯金具は、ベンシ  
ョ塚鞍と同様に、幅広であるが、下辺には鉾帯も折り返  
しもない。鞍の付く位置には長方形孔がある。

大阪府藤井寺市鞍塚古墳<sup>(9)</sup> 前輪、後輪ともに鉄製の覆  
輪、海金具、磯金具、州浜金具が揃っている。覆輪の断  
面は、U字形で、幅狭である。海金具は、2枚の鉄板を  
中央で別の小鉄板を当てて鉾留めし、全面を覆う。磯金  
具は、ベンショ塚古墳鞍と同様に、幅広で、下辺の縁を  
折り返しており、鞍が付いたと思われる小孔2個がある。  
磯金具は、ベンショ塚古墳鞍と最も良く似ている。

大阪府豊中市御獅子塚古墳<sup>(10)</sup> 前輪、後輪ともに鉄製  
の覆輪、海金具、磯・州浜金具が揃っているが、海は、  
細い帯状のものを鉾留めしており、補強の為のものであ  
ろう。覆輪の断面はU字形で、幅狭である。爪先での  
木地との接合は、ベンショ塚古墳と同様に、外側から鉾  
を打ち込んでいる。磯と州浜は1枚の鉄板でつくる共  
造りで、磯の部分は幅が狭い。縁金具を留める鉾の間隔  
が広く、ベンショ塚古墳鞍より新しく位置付けられる。  
磯金具には長方形の孔があるが、鞍はベンショ塚古墳と  
同様の鉸具タイプであり、栗実形の座金具を伴う。ベン  
ショ塚古墳の鞍金具とは共通点の少ない形態を呈する。  
滋賀県栗東市新開1号墳<sup>(11)</sup> 前輪、後輪ともに鉄製の  
覆輪、海金具、磯金具、州浜金具が揃う。覆輪の断面  
は、U字形で幅狭である。海は1枚の鉄板で全面を覆う。  
磯金具はベンショ塚鞍と同様の幅広である。前輪には鞍  
が付くための長方形孔がみられるが、伴出しているもの  
のうち、鞍になりそうなものは、孔の大きさから考えて、  
ベンショ塚古墳鞍と同様の鉸具タイプの2点しかない。  
岐阜県池田町中八幡古墳<sup>(12)</sup> 前輪、後輪ともに鉄製の  
覆輪、海金具、磯金具、州浜金具が揃っている。覆輪の  
断面は、ベンショ塚鞍と同様の三角形であるが、緩やか  
に折り曲げたもので、必ずしも全体にわたって明確な三  
角形をなしているとはいいがたい。幅狭である。海は、  
おそらく1枚の鉄板で全面を覆うものと思われ、中央

に縦方向の鋌帯で補強している。磯金具はベンシヨ塚鞍と同様の幅広である。

宮崎市下北方5号地下式横穴墓<sup>(13)</sup> 後輪には覆輪、磯・州浜金具がみられるが、海金具は不明。磯金具は、ベンシヨ塚古墳鞍と同様の幅広で、鉸具タイプの鞍が付くが、御獅子塚例と同様に磯と州浜は1枚の鉄板でつくっている。

これらの国内の古墳出土鞍金具とベンシヨ塚古墳の鞍金具とを比べてみると、必ずしも形態的に一致するとは限らず、細かいところでは差異がかなりみられる。この差異は、ベンシヨ塚古墳の鞍との比較に限らず、初現期の鞍金具のそれぞれにみとめられ、単純に時期差とみることはできない。また、御獅子塚古墳の鞍金具のように他と比べて、かなり異なった形態もみられる。したがって、最初から複数系統が存在したことを否定することはできない。しかし、差異がある反面、共通している点もみられ、これらの初期の鞍が、舶載品であるか、国産品であるかを問わず、何らかの関連性をもっていたことがうかがわれる。細部の違いを強調するなら、製作、輸入にあたっての複雑な事情をそのまま想定することもできるが、共通点もそれぞれがもっていることからみて、細かく分類することに意義を見出せない。鞍金具のみで、あまり多くの系譜をみることは困難なように思われる。

海金具についてみれば、全面を鉄板で覆うものが多く、透かし彫のある例は数少ない。また、ベンシヨ塚古墳例のように海金具に方形鉄板を用いるものは少ない。朝鮮半島での方形鉄板を用いる例は、加耶の玉田70号墳出土鞍<sup>(14)</sup>があり、海の中央に1枚だけ方形鉄板を使用したものが知られている。また、玉田M3号墳出土鞍<sup>(15)</sup>は、亀甲形の区画ではあるが、ベンシヨ塚古墳出土鞍と同様に海金具を縦方向に分割する形態で、この鞍の鞍は鉸具型Aタイプである。同様の亀甲形の区画は、新羅の天馬塚古墳出土鞍<sup>(16)</sup>にもみられ、この磯金具の下辺は、ベンシヨ塚鞍と同様のB類にあたる。ただ、これら半島の諸例は、これまでの年代観では、ベンシヨ塚古墳より時期の下るものである。

御獅子塚古墳・下北方5号地下式横穴墓の例を除いて、州浜金具が磯金具と別づくりである点、幅広の磯金具であるという点は、初現期の鞍の一致した特徴であり、半島、大陸でもみることができる。ベンシヨ塚古墳の鞍金具は、最古型式に位置付けられる点、諸要素が半島で見られる点で、舶載品の可能性があるが、海金具として方形鉄板を使用した点を含めて、全く同型式のものは見当たらない。内山敏行・岡安光彦は、日本列島から出土し

た木心鉄板張輪鐙に、伽耶と同一の型式的特徴と変異幅があることから、輸入品と考えている<sup>(17)</sup>。このように考えると、ベンシヨ塚古墳の馬具も輸入品の可能性があり、本格的に鞍金具が国内で製作されるのは、鞍金具の変遷からもわかるように、新しいタイプが出現する古墳時代後期からであろう。(森下)

謝辞 本稿を成すにあたって、次の方々に資料の実見の機会の便宜をはかっていただき、ご教示いただきました。記して感謝いたします。

角田芳昭、千賀久、服部聡志、柳本照男、横幕大祐

註)

- 1) 西尾良一 1997「馬具」『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会、花谷浩 1996「鞍作の技術とその変遷」『畿内政権と鉄器生産』第2回鉄器文化研究集会 発表要旨集 鉄器文化研究会、花谷は、突起の上のみ縁金具と磯金具を貫通させる磯金具の留め付け手法の変化を馬具製作技術が向上し、多種多様な馬具が普及するなかでの、製作技法の変化、手法の簡略化としてとらえている
- 2) 千賀久 1992「日本出土初期馬具の系譜2」『橿原考古学研究所論集』第12 吉川弘文館
- 3) 増田精一 1965「古墳出土鞍の構造」『考古学雑誌』第50 巻第4号 日本考古学会
- 4) 宮代栄一 1996「古墳時代の金属装鞍の研究—鉄地金銅装鞍を中心に—」『日本考古学』第3号 日本考古学協会
- 5) A類・B類でも鋌脚の長さが短いものは責金具がなければ、革留の状態は不安定であると思われる。
- 6) 北野耕平 1963「中期古墳の副葬品とその技術史的意義—鉄製甲冑における新技術の出現—」『近畿古文化論攷』奈良県教育委員会
- 7) 千賀久 1988「日本出土初期馬具の系譜」『橿原考古学研究所論集』第9 吉川弘文館
- 8) 梅原末治 1934「大阪府下における古墳墓の調査」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第5 輯 大阪府、吉田珠己 1994「丸山古墳」『羽曳野市史』第3 巻史料編1 羽曳野市
- 9) 末永雅雄編 1991「盾塚 鞍塚 珠金塚古墳」由良大和古代文化研究協会。関西大学博物館にて実見させていただいた。
- 10) 豊中市教育委員会 1990「御獅子塚古墳」、柳本照男 2005「御獅子塚古墳」『新修 豊中市史』第4 巻 考古 豊中市 豊中市教育委員会にて実見させていただいた。
- 11) 西田弘・鈴木博司・金関恕 1961「新開古墳」『滋賀縣史蹟調査報告』第12 冊 滋賀県教育委員会
- 12) 真田幸成 1970「中八幡古墳発掘調査概報」池田町教育委員会 横幕大祐編 2005「中八幡古墳資料調査報告書」池田町教育委員会 池田町教育委員会にて実見させていただいた。
- 13) 野間重孝・石川恒太郎・茂山護・田中茂 1977「下北方地下式横穴第5号緊急発掘調査報告書」宮崎市教育委員会、西嶋剛広編 2020「下北方5号地下式横穴墓」宮崎市教育委員会
- 14) 趙栄済 1988「陝川玉田古墳群I」慶尚南道
- 15) 趙栄済・朴升圭 1990「陝川玉田古墳群II」慶尚大学校博物館
- 16) 金元龍・尹武炳・金基雄・ほか 1974「天馬塚発掘調査報告書」慶州市
- 17) 内山敏行・岡安光彦 1977「下伊那地方の初期の馬具」『信濃』第49 巻第4・5号 信濃史学会

なお、その他の馬具の文献は紙幅の都合で割愛した。

本稿は、「奈良市ベンシヨ塚古墳出土の馬具」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要2001』を主旨を変えずに改稿したものである。